

---

# えんじょいくらぶ

黒崎 由貴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

えんじょいくらぶ

### 【Nコード】

N5169B

### 【作者名】

黒崎 由貴

### 【あらすじ】

入学式にあつた女の子に一目ぼれをした俺、林佑。その子に少しでも会いたい俺はその子が入っている部活に入部するんだけど…『えんじょいくらぶ』って何！？愉快的先輩達に囲まれて、楽しい学校生活を…おくれなくおくれなく！！この先輩変わりすぎ…今日も放課後、くらぶは活動するっばい

## 入学式

俺は林佑。

今年高校に入学したはかりの高1だ。

さっき入学式も終わって、今は新入生が校門に溢れている。

この学校は女子の制服が多少人気があるらしく、はしゃいでいる奴もいる。

赤いチエックのネクタイとスカート。

白いシャツにブレザー。

んで紺ソックスに革のクツ。

いいもんか？

この学校家の近所だから見慣れるんだよね

ちなみに男子は短ラン…

まあでもこの学校は私服OKなんだけどな。

「ユウ、なーに暗い顔してんの？せーっかく親友の俺と同じ高校に入学できたのにさ」

隣にいたカズが口をとがらせる。

カズとは中学んときに席が近くて、それからいろいろ話すようになった。

今じゃ俺の大事な親友。

ただバカなんだけどな。

「いや、可愛い女の子いないな」と思ってたさ」

どちらかというと普通の奴ばっか。

中学んときは女子が少なかったからあんま女子に興味ないっつかどうでもいいんだけどさ。

1クラスに2、3人ぐらいだったし。

いや、だからといってホモとかじゃねーからな！

ただ免疫が少ないっただけで…

「確かに。俺等にしたら新鮮だよな」

「そつだな。でもちよつと違和感あるかも」

「じきに馴れるさ。それよりユウはもう帰るだろ。ゲーセン行かね？」

「ん」

俺は曖昧に返事をして周りを見る。

明日から通う学校。

俺が生まれた頃に建てられたからまだ新しい。

「ん？」

校門の近くの桜の木の下に小柄な女の子がいた。

儂げな表情のその子はすごく可愛い／＼／

## 仮親友ナルシ

「はあ」

俺は今日何度目かわからない溜め息を吐き出す。

溜め息をつくると幸せが逃げるって言うけど別にいいや。

俺そんなん信じてないし、幸せなんて人生でどうせちょっとしかないしな。

でも、昨日の女の子可愛かったな。

何組だろう。

また会えるかな？

って！俺恋してるみたいじゃん！

マジかよ。俺、恋なんてしたこと…

もしかして、は、初恋／＼／

「おい、お前。…林だっけ？」

「あ？」

後ろから声がするから振り返るといかにも不機嫌そうな男の顔。  
どちらかというといい男なのになんで眉間にしわよってんだ？  
別にどーでもいいけど。

「お前さっきから何回溜め息つくわけ？

こっちまで凹んでくるから止めてくんない？

もしかして彼女と別れたとか？

それともこのクラスに可愛い女の子がいから凹んでるわけ？

それならわかるよ〜

俺もさ〜困ってたんだよね。

あ、俺ら同士なわけ？おー、じゃあ俺らは親友な〜

……なんだこの男。

入学式に言ってた俺が言えるセリフじゃないけど、クラスの子に  
失礼な奴だな。

あー、ほら。

いくら休み時間だからって女子が睨んでる。

これはクラスの女子全員を敵にまわしたな。

それになんだコイツのマシングントーク。

俺は何も言っていないのに勝手に解釈しやがって。

それになんで親友？早くね？

なんかナルシストっぽいし。

「あんだって…」

「あーごめんごめん。」

名前言っでなかったな。

俺は成瀬川志紀。

好きに呼んでくれ。

これからよろしくな」

成瀬川はそう言っで笑う。

んー成瀬川か。

成瀬川志紀…なるせがわしき…なるし…ナルシ！

ぴったりだ！

我ながらナイスなあだ名だと思っ。

「よろしくナルシ」

プッ

近くにいた数人の女子が吹き出す。

ん？俺なんか変な事言ったか？

「おう！」

学校生活一日目。

一時間目の休み時間にして『ナルシ』という奴と親友（仮）になった。  
あ、後であの子探そ。

入部（前書き）

やっと入部です

## 入部

「新人生諸君！是非とも野球部に入部を！」

「園芸部はどうですか？」

どこも新人生確保のために頑張ってるな

家に帰ってもする事がない俺は、入る気もないのにいろんな部を見て回った。

というのは表向きで、実はあの女の子を探してるだけなんだけど。

なかなか見つからないもんだな。

数百人いる生徒の中から見つける事自体無謀なんだけども。

たたたたた

小柄な女の子が走ってくる。

みんな私服なのに制服着てるなんて偉い子だ。（ちなみに俺も私服）

そんな事を思ってたら  
どんっ

「きゃっ！」

「うわっ！」

俺達はぶつかってしまった。

その子はその衝撃で尻餅をつく。

「あいたたた〜」

女の子は涙目になりながら、ぶつた箇所を擦る。

「ごめん！」

あわててその子に手を差しのべる。

そこで俺は気付いた。

この子昨日の女の子だ！

キレイに手入れされた髪。

くりっとした瞳。

いや、何よりこの愛くるしい顔！

間違いない。

「こちらこそごめんなさい。」

ちよつとぶ活に遅れそうで急いでたもんだから」

その子は俺の差しのべた手を掴んで立ち上がる。

「え…ってことは先輩なんですか？」

うそ…

中学生でもいけるぐらいなのに。

「うん。そうだよ。」

今二年生。

あ、そうだ君一年だよな。

ぶ活すごく面白いから見に来ない？」

俺より身長が低い先輩は涙目のまま、俺を見上げる。

うわっ上目遣いだ、心臓に悪っ

先輩止めて…近いし可愛い！

もう心臓バクバクいつてるし。

「いや、先輩が入部してるなら俺…じゃない。僕、その部活に入部

しますよ」

「本当？ありがと

「じゃあこの入る届に名前とクラス書いてね」

先輩はどこから取り出したのか、

入部届とボールペンを手渡す。

「はい」

壁を使って紙にサラサラと書き先輩に渡す。

「これでいいんですよね？」

「うん、いいよ。」

林佑君ね。

よし、じゃあ早速ぶ室行「っか」

「はい！」

立ち止まっていた俺らは歩き出す。

先輩歩いてても可愛い。

そういえば俺、先輩の名前も今さっき入ったばかりの部活も知らないや。

部室にいったら聞こう。

「ここだよ」

先輩は四階の一番角の教室の前で止まった。

「ここですか？」

「うん。そうだよ」

先輩は不思議そうな顔をする。

いや、先輩不思議なのは俺のほうだよ。

だってここ学習室じゃん。

生徒が勉強をするところであって、部室ではないのでは？

コンコン

そんな俺の考えなど知らない先輩は部室をノックする。

「あいことばは？」

部室から気の抜けたような男の声がある。

は？合い言葉？

今時古っ！

じゃなくて何故部室に入るのに合い言葉が必要なんだろう。

「一日一本。みんなで七本毎日欠かさずチュッパを舐めよ」

えっ何それ。

某牛乳のCMデスカ？

確か歌もあったけど古いよっ！

絶対今の子知らないよ！

あっ、なんで俺が知ってるのかはツッコミ入れないように。

「うーかく」

合格なんかい！（ツッコミ）

しかも合格じゃなくてうーかく？

ガチャン

鍵が外され扉が開く。

「マチおそかったじゃん」

そこには先程から一度も漢字を使っていない男が立っていた。

眠いのかだるいのかわからないがなんだかやる気のなさそうな顔。

でも男の俺が言うのもなんだけどカツコイイ。

プラチナブロンドの髪はキレイに輝いているし、整った顔。

俺よりもでかいのがムカツクけど（俺は165）

170以上はあるよな。

「ごめんごめん。」

でもね、新人ぶ員連れてきたよ。ほら」

先輩は後ろにいた俺を押す。

「…ことしのやつはひとりなんだ。」

まあはいりなよ」

ぐっちと呼ばれた人は俺をちらつと見ると、教室にあるイスに座った。

ぐっちさんが視界から消えた事により教室内が見えるようになった。

意外と学習室は広い。

それに、ぐっちさん以外にも人がいる。

「……全部で六人か。」

「つてあれ？マチ先輩と同じ顔の人が。」

「俺と同じ短ラン着てるけども。」

「マチく遅かったから心配したじゃん。」

「寂しかったよ。」

「マチ先輩そっくりな人はマチ先輩に抱き付く。」

「マチ先輩より数cm小さいみたいだ。」

「だからごめんって。」

「それよりアーサー。」

「みんなもそろってることだしこの子の紹介しようよ。」

「そうだったね。」

「ごめんよ、後ろの少年。」

「はあ……」

何なんだこの人。

アーサー？

あの王様か？

「おいで、少年」

そっくりさんもといアーサーさんは俺の手を引っ張る。

体は細いのに意外と力が強い。

教卓の前までくると、バンツと教卓を叩いた。

なんで学習室に教卓があんだよ…

教室にいたみんなの視線が俺に集まる。

「この子は今年の新人ぶ員だ。

みんな悪いけど今から適当に自己紹介して。

まずは私からね」

いきなり声が高くなる。

えー私！？

短ラン着てるのに？

見た目だってマチ先輩にそっくりだけどどうみたって男なのに。

「私は二年A組の朝倉弥生。

アーサーって呼んで。

えんじょいくらぶのぶ長だよ。

よろしく」

にっこりと微笑んだ顔は本当に似ている。

似過ぎだけど。

でも何故アーサー？（再び）

「んで、たつつん。つー。ナギ。オタ。ぐっち。締めはマチね。

しっかり立って言ってよ」

ガタンという音とともに男の人が立ち上がる。  
なんか不良っぽい。

カッコイイけど怖い。

今流行りの羽とかのアクセ付けてるけど、なんかそこらの人とは違うオーラ出してるよ。

「三年B組の森本巽だ。」

「ここじゃたつつんって呼ばれてる／＼」

たつつん。

見た目に合わず可愛いあだ名。

たつつん先輩は少し顔を赤くしながら座った。

「次は僕だね」

すごくキレイな男の人が立ち上がる。

男の人にキレイなんて言うのはおかしいけど、この人を表すのはこの言葉しかないだろう。

一つ一つの動作は流れるかのようでとても華麗だ。

なんだか男の人とも女の人とも言えない中性的な人。

それが第一印象かな。

「僕は二年C組、椿薫。」

「一応このくらぶの副部長をやってるから何かあったら言ってね。」

…ああそつだ。つーって呼んでね」

つー先輩はキレイは笑みを浮かべながら座る。  
そんな些細な動作すら美しいと思えるのだからつー先輩は不思議だ。

「えつと私、ですよね」

和服とかが似合いそうな女の人が立ち上がる。  
大和撫子ってこういう人のことを言うのかな？

どちらかというときレイな部類に入りそう。

でも控えめな美しさとどこか儂げな印象だ。

腰の辺りまで伸ばされた髪は、さっきまで結んでいたのかかるく跡がついている。

でも三つ編みをしたのか、ちょっとウェーブをかけたみたいになつてる。

「二年A組川崎渚です。」

よろしくお願いします。

ナギ、と呼んで下さい。」

ナギ先輩が丁寧にお辞儀をしたので俺もつられてお辞儀をかえす。

「次俺だっけ？」

ナギ先輩が座ったのと同時に入れ替わるように男の人が立ち上がる。

前髪がちよつと長くて目に入ってそう。

最近見なくなつた丸めがねをかけてる。

なんか変な人。

「俺は3年B組糺雄太」

しいなおた？

珍しい名前。

「『ゆうた』と書くが『おた』だからな。

オタ、と呼んでくれ」

念を押すように言ってから先輩は座つた。

『おた』ってこの人の親は何を考えてるんだよ。

オタクか？

可哀相に。

きつといじめられたりしたんだろうなあ。

えっと、後自己紹介をしてないのはさっきのぐっちさんとマチ先輩

ただだよな。

でもそのぐっち先輩は気持ちよさそうに夢の世界に旅だっていた。  
(つまり寝てた)

さっきまで起きてたのに寝るの早っ

「お昼寝中のところを悪いけど最後はぐっちだよ。

ぶ長命令だ、起きろ」

怖っ！

アーサー先輩最後の一言に脅しが含まれてるよ。

一瞬目も危なかったし。

なんかこう…悪魔降臨！みたいな。

「佑くん？何か言ったかな？」

さっきの顔でアーサー先輩が問い掛けてくる。

俺何も喋ってないよな？

先輩達を見ると先輩達は笑っている。

え？もしかして声に出たとか？

「あのね…」

つー先輩が笑いながら教えようとしてくれた時

「ふぁー。よくねなかった。アーサー、もうちょっとやさしくおし  
してよ」

ぐっち先輩が目を覚ました。

なんでそこで目を覚ますのかな？

アーサー先輩が言ってすぐじゃなくて何で今？

「何言ってるの。」

私はいつだって優しいじゃない。

そんなこといいから早く自己紹介してよ」

「んーにねんぐみ、やまぐちさとるです。

ぐっちてよんでください」

言い終わるとぐっち先輩は再び寝始める。

すでに規則正しい寝息が聞こえている。

有り得ない。

寝るの早すぎ。

それにひらがなばつかで読みにくい。

「ぐっちは漢字が嫌い、ひらがなばかり使いますけど馴れれば大丈夫ですよ。」

それにいい人ですし」

今度はナギ先輩が教えてくれる。

長い付き合い（？）の先輩が言うんだから大丈夫かな。

「最後俺だよな」

俳優顔負けの美声が教室に響く。

あれ？こんな声の人いたっけ？

「二年A組朝倉真知。」

このくらぶのぶ長をしてるからよろしく。

マチって呼んでね」

声の主はマチ先輩だった。

.....。

もしかして、いや、もしかなくても男!?

「アーサー、そろそろ服返して〜。」

やっぱり一回目はちゃんと自分の制服着たほうがいいって

はい決定!

「そうだね。」

記念すべき一回目だし」

マチ先輩とアーサー先輩は制服を脱ぎ、制服を交換していく。

俺はもう何か言う気力すら残っていなかった。

さらば、俺の初恋...

## 放課後

「はあ」

俺はまた溜め息をつく。

全く今日で何回目だよ。

先輩達に用事があつたからあれから少ししてくらぶは終わった。

今は、サッカー部を見学に行ったハズなのに、先輩達と混じって練習をしているカズを待っている。

ちなみにカズは中学でもサッカーをやっていた。

県大会でも優勝したり、キャプテンだった事もありカズは推薦入学だ。

噂によると二年の時ぐらいからここ（高校）はカズを狙っていたとかなんとか。

「その時から進路決定みたいなの？」

それでも、ここは県内でも一、二を争うサッカーの強豪校。

だからカズも頑張っている。

カズが頑張ってサッカーをやっているのは知ってるけど、俺は勉強で頑張って入学した組だからちょっと悔しいかも。

まあカズの事はいいとしてだな。

俺、なんてくらぶにはいつちやっただろう。

初恋の人は男だし、なんか先輩は変わり者ばっかだし。

一癖も二癖もありそう。

『明日もくらぶはあるからね。』

放課後、授業が終わってから15分以内にこの教室に来ること。

わかった？』

『あと制服着て来てよね。』

くらぶの約束だから』

アーサー先輩とマチ先輩の言葉がよみがえる。

くらぶは制服って一体何をやるんだろう。

俺が来た時になんかやってた様子もなかったし…自由に何かするとか？

でも、それなら別にくらぶに入らなくてもいいよな。

うーむ、よくわからない。

「おいユウー！」

どうしたんだ？」

気が付くとカズの心配そうな顔が目の前にあった。

「うわっ！！」

俺は思わず一歩ひく。

カズは悔しいぐらいに顔が整っていて美形なのだが、だからといってアップはびっくりする。

「むっ！」

なんだよ失礼だな。

何度声をかけても返事をしないから心配してやったのに「

傷ついたぞーなんて言いながら頬を膨らませる。

ったく。

コイツちょっと子供っぽいなだよな。

見た目とは違つてさ。

俺のが中身大人なんじゃないか？

悲しい事だが、俺の顔は童顔でカズとは正反対なんだけど。

流石に身長が身長だから小学生に間違われたりしないものの、中一くらいに間違われるのはしょっちゅうだ。

自分で言ってるマジ悲しいし。

「ごめんごめん。」

ちよつと考え事をな」

「ふーん。」

どんな事？」

「それがさ……」

俺は帰り道、放課後にあつた事を全部カズに話した。

俺は家まで歩きで十分ぐらいだけど、カズはチャリで二十分ぐらいかかる。

中学と正反対の位置に高校があるから毎日大変っぽい。

中学はカズ家が近くて楽しってたもん。

で、俺ん家はちよつと通学路にあたるから一緒に帰ってる。

中学の時はコイツの家が俺の通学路にあたってたんだけどなあ。

「くくく。」

お前やつぱ面白すぎね……」

話終えた途端、自転車をひきながらカズは笑い出す。

「笑うなよ」

「これが笑わずにいられるかっての。」

普通どんなくらぶかわかんないのに入るか？

しかも入部理由が初恋の子と一緒にいたいから？  
可愛らしいといつかなんとというか…」

俺は言い返す言葉が見つからない。

自分でも思い切った、馬鹿みたいな行動だと思っているから。

「しまいにはその人男だつて？

あー、腹いて…」

「う…」

一番気にしていることを言いやがって。

初恋は叶わないって言うけど、こんなの悲しすぎる。& 恥ずかしい。

穴があつたら入りたかった。

「明日から大変だな」

カズは茶化すような笑みを浮かべながらそう言う。

人事だと思いやがって。

いや、人事なんだけどさ。

「…うん」

俺は力なく頷く。

「カズも頑張れよ。」

練習きついみたいだし」

推薦だし、特待生だから練習は並のものではないだろう。

もし、気を抜いたりしたら大変なことになる。

「ああ。」

すぐにレギュラーとってやるよ」

流石カズ。

気合いもやる気もいっぱいだ。

先輩が聞いたら怒りそうだけど。

「さっすが〜。」

でっかい男だねえ」

「まあな。」

つと、そういえば俺今日は茜を迎えに行かなきゃいけないんだっ

茜ちゃんはカズの10歳下の妹。

カズにどこか似てるけど、寂しがり屋で泣き虫。  
まだまだ小さいから当たり前前なんだけど。

「今日おばさん遅いんだ。」

なら、早く行ってあげなきゃ。

茜ちゃん泣きそうになってるかもよ」

茜ちゃんはまだ保育園に馴れないのか、おばさんが迎えに来るととても喜ぶのだそうだ。

友達とかいないのかな？

俺は逆に迎えが来るのが嫌だった。

みんなで遊ぶのすごく楽しかったから。

「ああ。」

花見に行って泊まりなんだとよ。

「ごめん。もう帰るな」

「うん、また明日」

「またな！」

カズは元気よくチャリをこぎ出す。

サッカー部の脚力のせいか、もうチャリは見えないくらい遠ざかっている。

早っ！

家が見えていたし、俺は憂鬱を隠してまた歩き出した。

憂鬱なのはくらぶはもちろん家にも原因がある。

ピロリン、ピロリン。

メールがきたのかケータイがなっている。

誰だ？

バカン。

ケータイを開ける。

09000000

ん？

マジで誰だよ。

『件名：一年生へ

一応ちよっとお金もってきてね。

あと、遅れたら許さないから) ^ - ^ (

マチ  
『

ええ!!!

なんでマチ先輩から?!

なんで知ってるの?!

やばい。

先輩やっぱり怖い。

## あだ名決め

キーンコーンカーンコーン

今日の授業（クラスの係決めなど）を終える音が校内に鳴り響く。

ついにきてしまったか…

放課後がくるのが早い！

どれだけこの時間がこない事を祈ったことか。

思わず涙が出てきそう。

一応今日制服着て来たけど、何やるんだろつ。  
足取り重く階段を昇る。

マチ先輩に会いづらいなあ…

これから部活…じゃなくてくらぶがイヤだなあ。

なんて言ったら先輩が抜ける一年半耐えないよな。

とは思いつつ足取りは相変わらず重い。

やっとぶ室の前に来た時には授業終了12分後。

後3分で入らないとよくわからないけど何かあるんだよね。

カチッ

右腕の腕時計の長針が動く。

後2分。

どうしようっ…

ええい！！男は度胸だ！！

コンコン

勇気を出してドアをノックする。

「合い言葉は？」

この声はナギ先輩？

これ言うのって当番なのかな？

いや、そうじゃなくて、合い言葉なんか知らないよ。

昨日マチ先輩はチュッパがどうか言ってたけどよく覚えてないし。

ツッコミを何回か入れたのは覚えてるんだけど。

うーんなんだっけ？

「昨日の1年生だよね？合い言葉わかる？」

俺がいつまでも言わないのでナギ先輩が声をかける。

わかる？と聞かれたらわからないとしか答えられない。

だって全く知らないし。

「わかりません…」

「あれ？アーサー」

「ん？」

「1年生に教えてあげなかったの？」

ナギ先輩がアーサー先輩と話を始める。

今の流れからするとアーサー先輩が合い言葉を伝えるみたい。

俺は聞いてないけど。

「失礼だな、この私が伝え忘れるわけないじゃん。」

1年生がそれを忘れてるんじゃない？」

うそっ！

聞いてないって。

「うーん。」

伝えるあるみたいですけど？」

「でも本当に聞いてな…」

ガチャン

突然ドアが空けて腕を引っ張られる。

「うわっ」

いきなり力強く引っ張られたせいで俺は前のめりに倒れそうになる。

ぼすっ

しかしやってきたのは床とぶつかる衝撃ではなく、人にぶつかった感触だった。

ぶつかったというよりはその人の胸に収まったと言った感じ。

「あーあ。

ダメだよたっつん。

あと数秒で遅刻だったのに」

あわてて時計を見るとカチッと長針が動き、15がたった。

セーフ。

「ありがとうございます」

見上げみると、たつつん先輩の顔があった。

背え高っ！

俺より10cm以上は高い！

「ん？ああ。

お前なあー俺の時もそうだけど、人をはめんの止めるよ。

ぜってーあれじゃわかんねえって」

たつつん先輩は俺の頭に手をのせる。

そしてアーサー先輩を睨む。

なんか子供扱いされてるみたいでやだな。

たつつん先輩の後ろにはそんな俺を見て微笑んでいるナギ先輩。

そんなに俺は子供っぽいのかな？

「でも私なりにわかりやすくしてるつもりだけど？」

「そうだよーアーサーと僕はそれで毎日頭を悩ませてるほどだよ」

マチ先輩が悲しそうな顔をしながらイスから立ち上がり、アーサー先輩の肩を抱く。

「そうそう。」

心外だなあ〜。

私のガラスハートが壊れちゃうよ。

シクシク…」

アーサー先輩は泣き始める。

嘘くさっ

涙もそうだけど2人の発言が嘘くさい。

絶対いつも誰かをはめるつもりだこの2人…

「勝手に泣いてろよ」

2人を一瞥するとたつつん先輩は近くにあるイスに座る。

ついさっきまでマチ先輩が座っていたイスだ。

俺もとりあえず2人から離れて、たつつん先輩の近くに鞆を置く。

「今日もあの2人は元気だね」

つー先輩がアーサー先輩達を見て微笑む。

つー先輩はたつつん先輩の横に座っている。

「ですね」

俺はそのぐらいしか言えなかった。

「そういえば本当に昨日は合い言葉聞かなかったの？」

メールとか来なかった？」

メール…？

来てたけど合い言葉とは関係ない気がする。

制服のズボンからケータイを出してアーサー先輩からきたメールを見る。

やっぱり関係ないよな？

「これですけど、合い言葉なんて書いてないですよ？」

俺はつー先輩にメールを見せる。

「ん？」

ちよつと貸して」

つー先輩にケータイを渡すと、つー先輩はクスツと笑った。

え、何で？

そんな変な事書いてあるっけ？

「ちゃんと書いてあるよ。」

ほら

「先輩は『遅れたら許さないから』という部分を指差す。」

「うわー指細い。」

「女の子みたい。」

「肌も白いし。」

「ってそこじゃない!!」

「これが合い言葉？」

「ねえナギ、オタ今日の合い言葉ってこれだよね？」

「ん？」

近くの机でノートパソコンをいじっていたオタ先輩は、ノートパソコンを閉じる  
とこっちに歩いてくる。

ナギ先輩も来てケータイを覗き込む。

「だな」

「これですね」

2人はほぼ同時に言う。

マジ？

こんなのが合い言葉？  
こんなのでいいの？

「慣れればわかるようになりますよ」

「そうそう」

2人はもう慣れたのかな？

なんて事を思っているとナギ先輩の後ろからいきなりマチ先輩とアーサー先輩が出てくる。

「「そんな事よりくらぶ始めるよ」」

みんなはやれやれといった顔で移動する。

そして昨日と同じ席に座る。

席が決まってるのかな？

アーサー先輩とマチ先輩は黒板の前に立つ。

「1年生はたつつんの横に座って」

「はい」

俺は言われた通り、たつつん先輩の隣に座る。  
「んじゃー今日のくらぶを始めるよ。」

今日やる内容は」

「「1年生のあだ名決め」」

いちいち八モる必要があるんだろうか。

多分ない。

「やっぱり」

「一応考えてはおいたけど」

たつつん先輩とつー先輩はこうなる事がわかってたみたいだ。

くらぶのみんなはちょっと変わったあだ名だけど、それはみんなで決めてたんだ。

本当に変わってる。

あだ名なんていちいちみんなで決めなくてもいいと思っただけど…

「じゃあ今日は挙手でいくからね」

途端、全員が手をあげる。

ずっと寝てると思っていたぐつち先輩もだ。

挙手の結果、俺のあだ名候補は

ユウ

ユウちゃん

はや

ゆう

ユ一

ユ一カリ

林

……。

何コレ。

ユ一ってYOUみたいだし、ユ一カリとかすでに俺と関係ないじゃん！

ユウとゆうだって普通に喋ってる分には関係ないし。

でもそんな事言ってるどぐっち先輩の存在が危うくなるから止めとこう。

「じゃあこの中でどねがいいと思っつ？」

マチ先輩がそう聞くとぶ長以外は

「ユウ」と言った。

アーサー先輩とマチ先輩は  
「ユーカーリ」って言った。

理由はアーサー先輩が考えたあだ名だからだと思っ。

俺そんなの絶対いや。

「「ちえー多数決には従わなきゃだね」」

二人はがっかりしたような顔をする。

おいおい！

そんなにユーカーリにしたかったんかい！！

「いつもは多数決無視するくせに」

「ねー」

オタ先輩とぐつち先輩は冷たい視線を向ける。

「失礼なー」

「んなことないもーん」

「そうですよ。」

明日雨が降ったらどうしましょう」

ナギ先輩、それフォローになってない。

フォローする気があるかどうかは謎だけど。

「雨ですめばいいけどな」

「春なのに雪が降るかもね」

……みんな毒舌……

それが今日わかった事。

あと、あだ名は多分ユウなんだと思う。

早くくらぶ終わらないかな……

文句を言ってる2人を見ながら俺はそんな事を考えていた。

## 突然の誕生日パーティー（前）

「ふあゝ」

俺は布団の中で小さく伸びをする。

今日は土曜日。

のんびり寝ていても大丈夫。

もう一回寝てもへーきだけどどうしようかな。

ベッドサイドの目覚まし時計は11時を告げている。

…起きよう。

携帯のディスプレイを見るとメールがきている。

誰だよ土曜日の朝っぱらから。

って11時じゃあ昼か。

メールを見ると新着メール30件…

はあ？

何これありえねえ…

誰だよ

メールをとりあえずみると、みんな「えんじょいくらぶ」の先輩達からだった。

アーサー先輩以外の先輩には昨日メアドを教えるからきてもおかしくない。

でもこの量は異常だろ！！

内容は、アーサー先輩とマチ先輩以外は登録しといてって内容のメール。

で、あとの24件がアーサー先輩とマチ先輩によるもの。

つておかしいだろ！！

2人で24件って事は一人12件だぞ！

なんでそんなにメール送れるんだよ！

なんで俺こんな時間からツツコミしまくってるんだろっ…

こんな調子じゃツツコミの天才になっちゃっよ。

ツツコミに天才とかバカがあればの話だけど。

2人のメールは見るのが怖かったから、まずは他の先輩達のメアドを登録する。

なんかみんなのメアド暗号みたい。

初期のやつから変えてないんだ。

珍しい人もいるもんだ。

『解けかけた糸に気付きました』

携帯がなる。

げっ！またメールかよ

『マチ先輩』

ディスプレイにはそう表示される。

…これで25件か。

はあ〜一体何？

恐る恐る内容を見ると『ユウまだ寝てんの？さっさと起きない』

はあ？

土曜日だから好きに寝てていいんじゃないの？

そこまでくらぶで決められてるとか？

もしかして今日なんかあった？

残りの24件をあわてて見ると今日はオタ先輩の誕生日なのだそう  
だ。

だから、誕生日パーティーをする。

オタ先輩の家は一つ隣の駅の近くだから11時に駅に集合。(プレ

ゼントを持って)

24件はそんな事と今家にいるかどうかというものだった。

今はもう20分。

.....。

「うわーっ!!」

もうとっくに過ぎてんじゃん!!

まだ起きてから何もしてないから支度に10分はかかる。

駅までチャリで5分。

駅につくと35分にはなっている。

やばいいそがないと!

俺は自分でも驚くようなスピードで支度をする。

着替えて、顔洗って、歯を磨いて...

そのスピードは5分という自己新記録をうちたてるほどだ。

家には俺しかいないから良かった。

こんなにバタバタしてたら絶対うるさいもん。

「よしっ」

準備はOK！

でもプレゼントどうしよう…

オタ先輩と知り合って

だ今日で3日だから趣味とか全く知らないし…

それに今金ないから何も買えないし。

どうしよう。

ゲームのソフトとかでもいいかな？

別にいいよね。

オタ先輩ゲーム好きそうだし。

俺は急いでいらないゲームソフトを探す。

テトリスとかいらないうなゝあとぶよぶよとか。

俺は二つのDSソフトを見つけた。

これなら先輩も（多分）好きだよな。

偶然箱が残っていたのでソフトをしまつて、ちょっとラッピングをする。

時間は35分。

プレゼント探しに10分もかけてしまった…

これ以上待たせたら殺される…

俺はあわてて家を出ると脱兎の如くチャリをこぐ。

駅には2分程でついた。

「はあ…はあ…」

ものすごく疲れたけど。

人間死ぬ気になればこんなもんならうか。

駅は広いから探すのに時間かかるかと思いきや、『えんじょいくらぶ』御一行は売店の前に集合していたのですぐに見つかった。

いつも制服姿しか見ていないから私服は新鮮。

というか変な感じ。

制服以外にも着るんだ。

それは失礼だろうけど。

たっつん先輩とぐっち先輩はカジュアルな服装。

背も高いしすごく似合ってる。

カッコイイなあ。

俺もあれぐらい身長が欲しい。

たっつん先輩はカッコイイアクセ付けてるし。

どこで買ってるんだろう？

ちよつとごつつい感じだし。

っー先輩はなんていうのかな、さわやかな感じ。

白いTシャツとジーパン。

先輩らしくて似合ってる。

ナギ先輩は春らしく、薄いピンク色（サクラ色？）のワンピースを着ている。

長い髪はそのままにしてあっておしとやかな女の子の見本みたい。

清楚ってこういう時に使うのかな。

手にはみんな近くのスーパーのレジ袋を持っている。

もう買い出ししちゃったのかな。

「遅れてすみません！！！」

俺が声をかけると先輩達は怖い目で俺を見る。

「やっとな来たか」

「本当…遅れるならメールしてよ」

「次は気をつけて下さいよ」

「まってるあいだにかいものできてよかったけどね」

たつつん先輩とつー先輩、ナギ先輩とぐっち先輩は顔は怒っているものの、本当はあまり怒ってないみたい。

「本当にすいません」

「甘い！」

ビシッ

「甘すぎ！」

バシッ

ほぼ同時に頭を叩かれる。

「いったー」

本気で叩かれたのか目茶苦茶痛い。

「ユウ」

「ーっ言っておじっ」

「「ごめんですんだら警察はいらないんだよ」「」

バシーン！

ハリセンみたいな物で後頭部を強打される。

いきなりの衝撃のせいで意識が飛びかける。

やばいおじいちゃんが川の向こう側で手招きしてるよ…

「っっておじいちゃんまだ死んでないし！！」

意識が戻ってそう叫ぶとみんなが笑っていた。

「おじいちゃん？いきなりどうしたの？」

あんたらが原因だよ、あんたらが…

「全く。いたた…」

連続で叩かれたせいですごく痛い。

どのくらい痛いかって？

そんなの言葉にできないくらい痛いに決まってんじゃない。

体験してみたらわかるだろうけど、そんな勇者がいたら俺はそいつを褒めたたえるよ。

「先輩何するんですか！」

「……」

「あゝ」

「言っちゃった…」

「言っちゃいましたね」

「おれは知らないよ」

何かマズイ雰囲気…

俺なんか変な事言った？

ぼん

アーサー先輩とマチ先輩が俺の肩に手をのせる。

極上の笑顔付きで。

「「とりあえず切符買ってきな？君の愚行についてはその後でゆっくり話してあげるから」」

「は…はい」

コワイよ先輩…

急いで切符を買って戻ってくるとナギ先輩とたつっん先輩が哀れむ様な目で俺を見ていた。

つー先輩は笑ってるし、ぐっち先輩は…立ったまま寝てる!？

そんなすごい芸当出来る人いたんだ。

「買って来ましてけど」

「「じゃあこれよろしく」」

2人は黒い笑みを浮かべながらレジ袋を俺に押しつける。

しかもみんなが持っていたの全部。

「えっ！？ちよつとなんですかコレ」

ナギ先輩とたつつん先輩のあの目はこういつ事かよ。

「何コレってレジ袋だけど？」

「そんな事も知らないの？」

そうそうこのお店のマークが何よりの証拠。

「じゃなくて！」

何で俺がこんなに持たなきゃいけないんですか！

「罰ゲームだよ」

「遅れて来たし、『先輩』って言ったしね。

まあちよつとの間だから大丈夫。

そろそろ電車くるからホーム行かないと」

2人は駆けて行った…  
よくわからん。

ノリについていけないし。

仕方なく持つけど重い…

こんなに買ってどうすんの。

「さきいつてるね」

ぐっち先輩も2人の後を追うように行ってしまつ。

薄情者ー！

まあ俺が悪いんだけど。

「ごめんなさい」

「ごめんね」

ナギ先輩とつー先輩も行ってしまう。

そんなあ…ナギ先輩とつー先輩は味方だと思ってたのに。

すると以外な事に

「…大丈夫か？」

たつつん先輩は袋を二つ持ってくれる。

「あ、ありがとうございます」

見だ目ちよつとコワイけど優しいんだな。

「急ぐぞ」

早歩きでスタスタと行ってしまふ。

「はいっ」

俺も四つの袋と格闘しながらホームへと向かった。

「セーフ」

駆け込み乗車つてあんまりしたことないけど、今日のこれは仕方ない。  
疲れた

でっかい袋を四つ持つのってしんどいよ

「結構のんびりしてたんだね」

キレイな笑みを浮かべたつー先輩が俺の近くにやってくる。

「なっ！これでも急いで来ましたよ」

「でもおれらがやるときよかずーっとおそかったよ」

あんたらは超人かい！

「じゃああなたならさっきどのくらいでホームに行けたって言うんですか？」

「ん〜ふつうにあるくのおなじくらいかな？」

いや、それはおかしいだろ。

どんだけの力と、邪魔な袋をなんとかしたらそうなるわけ？

俺らって言ったけど、ナギ先輩は絶対そんなことなさそうだし。

「ナギせん…んぐっ」

先輩と言おうとしたらっー先輩とたっつん先輩に口を塞がれた。

「んー！」

なんでこんなことするんだ？

また『先輩』がどうのこうのってやつ？

「ユウ」

たっつん先輩が俺の耳元で囁く。

「次に『先輩』って言ったらお前大変な事になるぞ」

そう言つと手を話してくれた。

「くらぶの約束だから守つてね？」

ニコリとつー先輩は笑う。

相変わらずつー先輩は笑つてもキレイだけど、今の笑みには脅しが含まれてて怖い…。

「じゃあなんて言えばいいんですか？」

「僕だつたら普通につーとか」

要は呼び捨てにしろつて事だよな。

それだけなのになんで罰ゲームとかあるんだよ。

マジこのくらぶよくわからん。

「はあ…」

「僕、約束とかきまりとか守れない人つて人間のクズだつて思うんだよね。」

君がクズつて言うわけじゃないんだよ？

ぶ員でありながらくらぶのきまりを知らなかったただけだから」

グサグサグサッ

つー先輩の毒の矢が俺に何本も刺さる。

見た目とは違って言う事キツイ。

「でも、これからは大丈夫だって信じてるから。

ね、ユウ？」

ねって言われても…

「ついたみたいだよ」

俺らを傍観していたぐっち先輩は、たつつん先輩を引きずって一足先に降りる。

俺も袋と再び格闘して電車を降りる。

その時、ナギ先輩とすれ違った。

「私、時間を守れない人って嫌いなんですよね」

ちよっと俺のほうを見たナギ先輩の顔は笑ってたけど、怖かった…

なんでこのくらぶの人達ってみんな美形で笑顔もキレイなのにこんな毒舌なの？

怒ってるのに笑ってるときなんかみんなすごく怖いし。

オタ先輩には悪いけど、オタ先輩誕生日パーティーなんかほっといて早く帰りたい。

早くもなんか挫折しそう…。

俺なんでココにいるんだろう。

なんで俺はマチ先輩なんかに一目ぼれしちゃったんだろう。

確かに女装して大人しくしとけば完璧なんだけどさ。

でも男だし、常にハイだし、重要連絡事項は俺にだけ教えてくれな  
いし。

自分が嫌になってくる…。

俺はなるべくみんなと関わらないようにして後ろについていった。

## 突然の誕生日パーティー（中）（前書き）

更新が遅くなりまして、本当に申し訳ありません。もう六月も終わりではありますが、続きです。

## 突然の誕生日パーティー（中）

ピンポン

インターホンを押すとお決まりの音がする。

ここはもうオタ先輩の家の前。

本当に駅の近くで、歩いて5分ぐらいかな。

たった5分といえども4つもの袋を持っている俺にとってはすごく大変だった。

美形集団の後ろを、4つもの袋を持ってもそそと歩いている俺を誰もが不思議に思ったんだろうなあ。

自分で言ってる虚しいし…。

自己嫌悪…なんてね。

ガチャリ

玄関のドアが開く。

そこにいたのは…

目を微妙に覆っている前髪をオールバックにして、Yシャツと黒いズボンという出で立ちの…オタ先輩！！

いつもは前髪とメガネでよくわかんなかったけど、すごくキレイな

目をしている。

オレンジのような濃い黄色みたいな色。

翡翠を目にはめ込んだみたい。

改めてオタ先輩を見ると、ちょっと幼さは残っているものの、いつもより全然いい。

カッコイイというか、大人と少年の間って感じかな。

実際背は低いし。

俺と数cmしか変わらないけど…

「遅かったな。まあ入れよ」

「…………おじゃまします」「…………」

「…おじゃまします」

遅れたのは俺です…

みんな俺のせいです。

申し訳ございませんです。はい。

俺一人、なんか気まずいオーラを放ってオタ先輩の自宅にあがる。

どわどわっ

持っていた荷物を降ろすとなんだか体が軽くなった気がする。

明日は筋肉痛かな。

にしてもオタ先輩の家はいいなあ。

玄関には小さな花が飾ってあって、すごくいい家だなあって思う。

俺の家と違って。

俺の家なんて…いや、言うの止めと。」。

「じゃあ始めますか」「」

双子（めんどくさいからこれからこう呼ぼう）は俺の置いた荷物をひょいっと持つと、まるで自分の家のようにズカズカと奥の部屋に行く。

…怪力？

俺より小さくて、力なさそうなくせしてひょいってあんたたち。

俺というポジションがちょっと切ないことになるじゃないか。

自己嫌悪…（再び

「ちよつと！ここはオタの家なんですから」

ナギ先輩はあわてて双子の後を追う。

なんだかお母さんかお姉ちゃんみたい。

どっか抜けてそうだけどね。

「じゃあ僕らは台所借りるね」

つー先輩もひょいっと荷物を持ち上げる。

つー先輩ならまだ分かるんだけどなあ。

「どーぞ。」

何か使いたいものあったらテキトーに探して使って

「サンキユ」

「ユウはオタとゲームでもしてな」

つー先輩は俺をオタ先輩に押しつける。

俺は小さい子供かよ…

たつつん先輩とつー先輩は台所に去って行く。

俺は初めて来たからよくわかんないけど、きっと先輩達は何度も来てるんだろっし。

向かった先は台所であってるハズ。

「じゃあ二階でゲームでもしてるか。」

ゲーム得意？」

オタ先輩は俺の前をゆっくり歩き出す。

「得意でも苦手でもないです。

でもあんまりゲームってやらないから…」

「そっか」

静かに階段を昇る。

この人歩くとき足音全くたててない。

一体何者だ？

曲者！

いやいやそれは違うな。

じゃあ生物！

ってわけでもないし…

はっ！俺は何ノリツツコミみたいな事やってんだよ。

いよいよ頭がおかしくなってきたか？

むしろ悲しい奴になってきた気がする。

気がするじゃなくて本当にそうなのかもしれないけど。

ギシツギシツ

階段を一段上がることゝ音が鳴る。

何で俺だと鳴るんだよ！

何？俺がなにかした？

もしくは重い？

確かにオタ先輩より身長はちょっと高いから体重もあるだろうけど。

そんなに重くはないハズ…

それか俺が乱暴に歩いてるから？

ドスツドスツ

俺は怪獣だ〜！

ってそれも違うから！！

「」

階段を上つてすぐのドアの前でオタ先輩は止まる。

ガチャリとドアを開けると俺の方を見て、目で先に入れと訴える。

「失礼します」

部屋に入ると意外と（？）片付いててびっくりした。

男子の部屋って汚いってイメージあるから何か変な感じ。

俺の友達（俺も含む）ってすごいことになってるし…

それに比べてこの部屋は…勉強机、小さなテレビ、ゲーム（棚にちやんとしまつてある）あとはベッドぐらいしかない。

ほぼ何もないに等しいんじゃないか？

ゲームだけは本当にびっくりするくらいあるけど。

あ、俺さっき棚にゲームがいっぱいあるって言ったけど、それはただの棚じゃない。

じゃあいくらなの？100均？なんて聞くなよ。そういうのじゃないんだから。

なんつーか本棚なんだよな。

作り付けの天井ぐらいまでの立派な本棚。

にもかかわらず、一冊も本は入っておらず入っているのはゲームオンリー。

どうよこの状況。

失礼を承知で言わせてもらうがオタ先輩ってゲームオタク？

「びっくりした？」

オタ先輩も部屋に入る。

まあ先輩の部屋だから普通のことなんだけど。

「はい。」

なんかすこ…」

正直に感想を述べる。

「お前正直だな」

そう言いながら先輩はちよつと笑った…気がした。

いつもなんとなく髪で隠れてたし、メガネもあつたからこの人の表情が変化するところなんて見たことなかった。

「だってこんなことで嘘つく必要とかないじゃないですか」

「フツ。」

変なヤツ」

今度こそ、（人を馬鹿にしてる感はあるものの）先輩は笑った。

「どこがですか」

「全部。」

英語にするとA111だな」

「なっ！」

心外な。

変わってると言われたことはあるけど変なヤツと言われたのは初めてだ。

「さて、それは置いといて何やる？」

とはいえ俺が持つてるのは全部同じ会社のやつだが」

「え？」

こんなに大量にあるのに？

なんかおかしくない？

「これ貰いものだから」

貰いもの？

こんなに大量に？

どれだけ気前のいい人だよその人。

「誰からの？」

「この会社からの」

「えー！！」

何言ってるんだこの人。

いや、もしかしたら会社の御偉いさんと知り合いなのかもしれないぞ。

うん。きっとそうだ。

「ゲームってバグがあったりするんだけど、それは実際にやらないとわからないんだ」

「へー」

確かに。

パソコンでカチャカチャやって見つかるくらいならバグなんてないだろうし。

「で、俺は実際にゲームをやってバグがあるかどうかを調べるバイトをやってんの」

なんかすごいなあ。

バグを調べる以上は隠しとかも全部やらなきゃいけないだろうし。

かなり失礼だけど、そこはオタクでカバーしてるのかな？

「で、これはそれのお礼。」

なんか俺って他のバイトよりも仕事早いみたいでさ」

うん。

なんかわかる気がする。

だってオタ先輩だし。

「でもなんで先輩が？」

バイトに応募したいなのをしたんですか？」

そんな大変な仕事を普通の高校生がやっていいのだろうか。

「……それは俺が会社にバイトをしたいと連絡を入れたという事は違う……よな」

あれ？俺なんか変な事言っただけ？

「多分そんな感じですよ」

うん。多分。

適当な言葉が見つからないからよくわからないけど。

「はあー」。

まあいいや。

バイトは親父から頼まれたんだよ」

「お父さんから？」

お父さんってその会社に勤めてるのかな？

「親父がゲームクリエイターだから、それでな」

…ゲームクリエイター？

ゲームを作る人？

確かパソコンとかが出来ないとかダメなんだよね。

あと、機械とかが扱える人。だっけ？

オタ先輩のお父さんって実はすごい人だったんだ…

棚にあるゲームって有名なやつもあるし。

なんか俺ってすごい人の子供と知り合いだったんだ…

## 突然の誕生日パーティー（後）

さて、準備が出来るまで俺とオタ先輩はゲームをすることになったわけだけど…先輩強っ！

さっきからいろんなゲームをしてるけど先輩の全勝。俺のぼろ負けが続いてる。

なんか有り得ないくらい上手い…

いや、それでお金貰ってるし上手くないとおかしいんだけどさ。

でもここまで完膚無きまでやられちゃうとへこむ。そんなにゲームやるわけじゃないけど、でもショックだ。

絶対この人ゲーセンに行ったらランキングを全部つめて帰ってくるんだろっ。

これも一種の才能？

いいなあ。何かしら才能ある人は。

俺なんか才能ない事が才能みたいな人間だからなあ。

平凡に生きていますとも。はい。

つてかえんじょいくらぶの人達が平凡じゃないから俺が逆に浮いてんじゃ…

双子はあんなだし、たつつん先輩はなんか他の人と違うオーラ出してるし、つー先輩もナギ先輩もなんかすごいし、オタ先輩はこうだし。ぐっち先輩は…いつも寝てるからわかんないや。

「はあ…」

思わず溜め息が出てしまう。なんかこの頃溜め息が多い…

「飽きた？」

オタ先輩が綺麗な瞳を向けて聞いてくる。

お願いだからこっち見ないで下さい。

なんか…眩しい。

こんな綺麗な瞳に見つめられたらすごく俺場違いな気がしてくる。

そんな瞳の事ばかり褒めてたら失礼なんだろうけどさ。

でもやっぱり慣れない。前髪+メガネの人がこんなになるなんて反則じゃないか？

漫画っばい。としか言えない。

今のままで学校行ったら絶対モテそう。

それこそ靴箱開けたらラブレターどばーみたいな。

うちの学校靴箱開けるタイプじゃないから無理なんだけども。

一回そんな漫画みたいなの見たいと思わない？

「オタクユウ、準備出来たよ！」

双子が下から叫ぶ。

うるさいっつーの！

一人でもうるさいのに二人もいたら二倍だよ。実際二倍だけど。

「もう準備出来たのか、早いな」

準備って、あの人は何の準備してたんだけ？誕生日パーティーかなんか？

だとしても早いな。

まだそんなに…たってる。一時間はたってるよ…。早いな

でも一時間じゃ大した事出来ないと思うけど…

いや、この人達にそんな普通の事を求めたらいけないんだ。多分。

「ユウ、行くぞ」

「あ、はい」

先輩はもうテレビとゲームを切ってドアを開けていた。いつの間に…

ただ俺がぼくとしてたからなんだろうけどさ。  
にしても学校と家とじゃ態度が全然違うな。

なんか変な感じ。

「うわ〜いつの間にこんな…」

オタ先輩に連れて来られてきた部屋にはいろんな飾り付けがされて  
いて、テーブルには豪華な料理が並んでいる。

なんかパーティー会場みたい。いや、今から誕生日パーティーする  
んだからパーティー会場であってるんだけどさ。

そしてテーブルの真ん中にはホールケーキが置いてある。

何故かショートケーキではなくチーズケーキ。

普通誕生日パーティーのケーキといえばショートケーキでしょ。

このメンバーの家がそうかは知らないけど、少なくとも我が家はそ  
うだ。

にしても料理すごいなあ。この一時間で作ったのかな？

どんだけ早いんだよ。

量だって結構あるし。

すごいとしか言い様がない。

「ユウ、早く座らないと。パーティー始められないでしょ？」

「すみません」

つー先輩に促されて近くのイスに座る。

一番隅っこの席で、左にはオタ先輩、目の前にナギ先輩。

なんか不思議な席…

それでオタ先輩の横がたつつん先輩。

ナギ先輩の右隣りには双子が、テーブルの縦の部分には左がぐっち先輩。右にはつー先輩という風に座っている。

「すごいでしょ！私とマチで飾り付けしたんだよ！」

「褒めて褒めて〜」

2人でこの飾り付けを…なんかそついうの得意そつだな。

実際キレイだし。

「すごいすごい。ご苦労様」

「ちえ〜そんだけ？」

双子にはこれで十分。

変に褒めてもうるさそつだし。

「料理は僕とたつつんとナギで作ったよ。  
時間無かったから適当になっちゃったけど」

「そうなんですか？

すごく美味しそう」

こんなに美味しそうなのに適當って貴方…

料理って言ったら目玉焼きがいいとこの俺に対しての嫌味ですか？

俺だったら同じ時間用意してもろくなもの作れないんだろうな…

いや、男は料理なんか出来なくたっていいんだ！

男は働いて帰ってきて、奥さんの美味しい手料理を食べる。

これだろ？

あ、でもレストランとか料亭ってテレビで見る限りでは男が結構働いていた気が…

やっぱり俺が出来なさすぎなのかな。

「じゃあローソクに火をつけるよ」

マチ先輩が18本のローソクに火をつけていく。  
小さな火が灯されてゆらゆらと揺れる。

ただ部屋が明るいからあんまり雰囲気が出ない。

昼間だし仕方ないか。

「ではではオタ」

「「「「「「「「「誕生日おめでとう!」「」「」「」

ふー、っと息を吹き掛ける。

残念ながらローソクの火は一気には消えない。

2度目でようやく火が全部消えた。

オタ先輩って意外と肺活量ない?

いや、元々あるとは思ってないけど、思ってたのより更に無かった。

俺は18本のローソクを吹き消した事ないから、どんだけ肺活量が必要かわかんないけどね。

パチパチパチ

7人分の拍手が部屋に響く。

「ありがとう」

「とりあえず、食事の邪魔になるのでケーキはどかしますね」

ナギ先輩が立ち上がってケーキを運んでいく。

「おなかすいた〜もうたべていい?」

今言つなよあんだ。

子供っぽいな。

せめてナギ先輩がケーキ置いて戻ってくるまで待とうよ。

あれ？そういえばいつの間にくつち先輩いるんだ？

確か家に来る時までいたけど、家に入るの全然見てない。

さっき先輩も手伝ってたって言ってなかったし。

「そういえばくつち先輩は何してたんですか？」

「あのね、ケーキかいにいったの」

ケーキを買いに？

ここらにケーキ屋さんなんてあったんだ。

俺こつちには全然来ないから知らなかった。

「誰かさんが遅れて来たせいでケーキを作る時間が無くなっちゃってさ」

「うん。誰とは言わないけどね」

「「「ね」」」

俺のせいですね。

わかってますよ。わかってますからこっちを見ながら言わないで下さい。

「どれにするかまよったんだけどさ。これがいちばんオタがたべれそうだったから」

オタ先輩が食べれそうなのじゃなくて、自分が選びに選んだ物を買ってきたんじゃない？

「確かに、これならオタも食べれそうだよな。平気？」

「まあ、チーズケーキなら食べれる」

意外とぐっち先輩はオタ先輩の事を考えて買ってきたんだ。

にしても食べれそうとか言ってるけど、ケーキ食べれないのかな？

「よかった」。

でもさ、あまいものたべれないとかじんせいそんなしてるよね」

人生にとってそんなに甘い物は重要か？

別に食べれなくてもそんなに損はしないと思う。

ぐっち先輩が甘党（多分）だからそう思うのかな？

「そろそろ頂きませんか？」

折角作ったのに冷めちゃいますよ？」

ナギ先輩はさつき座ってたイスにまた座る。

「食べる食べる」

本当に子供っぽいなこの人。

「じゃあみんな手を合わせて」

「「「「「「「「「「いただきます」」」」」」」

…とは言っても何から食べようかな。

いっぱいあるから迷う。

とりあえず目の前の料理を食べようかな。

少しだけ自分の皿にとる。

なんかキレイに盛り付けしてあったのが汚くなっちゃって、悪い事  
してみたみたい。

まあ仕方ないか。

一口食べてみると、今まで食べたものの中でこんなに美味しいものは無かった。ってぐらいに美味しかった。

「美味しい…」

口から素直に言葉が零れる。

これはもうプロとしか言いようがない。

もちろんプロの料理なんか食べた事ないけど、そのくらい美味しい。

すごく俺の好みの味だし。

「それたつつんが作ったんですよ。」

たつつんは洋食も和食もすごく得意なんです」

「僕とナギは和食しか作れないから羨ましいよ」

へへたつつん先輩がこれを。へへそうなんだ…

「って、え!？」

今なんて言った？

いや、聞こえてたけど、聞き間違えたとかじゃないよね？

でも、たつつん先輩が？

てつきりっー先輩とナギ先輩が作ってて、たつつん先輩が手伝ってたのかと思ってた。

なんか意外…

それに和食も作れるんだ…料理好きなのかな？

「お前そこで驚いたらいくら意外だからって失礼だろ」

呆れたような顔のオタ先輩に注意される。

「あつ！すみません」

ついつい声に出してしまった…

でも意外だなあ。

オタ先輩に注意されるのも意外だけど。

ってあれ？今のって注意じゃないよな？

むしろオタ先輩のほう失礼な事言ってるよ。

「お前のほうが失礼だったの」

こっん。とオタ先輩を小突く。

「わざと言ってるんだから当たり前だろ？」

うわータチ悪っ！

この人学校の外だと口かなり悪いな。

「でも、僕（私）達もお菓子とかデザートしか作れないし、本当羨ましいな」

…あんたらも何か作れるんかい。

それでまた上手いんだろうな。

料理好き集団め。

「…たいしたもの作れないけどな」

これでたいしたものじゃないとかあんた…

「謙遜しなくてもいいのに」

本当に。

「そんなつもりは…」

たつつん先輩って意外とこんなキャラだったんだ。

ばくばくむしゃむしゃ

俺達が話している間ずっとぐっち先輩は料理を食べてた。

あの一俺達の分も残して置いて下さいよ。

なーんてそんな事俺の立場じゃ言えない…

いつの間にやら料理の量がすごく減っていた。  
あんた一人でどんだけ食べてんだよ。

この多食いが！

さて、そんなこんなで美味しい昼食を頂いて満足満足

「「じゃあここでプレゼント渡し〜」

…プレゼント？

ああ、誕生日プレゼントか。

テキストに持ってきたやつだけどいいのかな？

「プレゼントってこの歳で貰うもんか？」

「まあまあ、そこはきにしないほーこーで」

プレゼントなんだから何歳になっても貰っても不思議じゃない気がするんだけど…

「誕生日おめでとう。」

気に入るかわからないけど、良かったら使ってよ」

つー先輩が小さな箱を渡す。

…気に入らないって言ったたらどうする気なんだろうこの人。

しかもその箱いつの間にか？

ついさっきまでそんなの影も形もなかったのに。

びっくりさせるために隠しといたのかな？

びっくりするどころか質問されちゃったけど。

「私は全然知らないですけど、DSっていうゲームらしいですよ」

いやいや、DSはゲームじゃなくてゲーム機だから。

ナギ先輩、それマジで言ってます？

だとしたら世間知らずもいいところだって。

今時保育園児だって知ってるって。

発売前にかなりニュースとかCMやってたし。

「DS？」

オタ先輩はナギ先輩の問題発言を無視したのか、はたまたそんなの聞いていなかったのか、がさがさと包装を破り始める。

急いでいるせいでキレイだった包装紙はぐちゃぐちゃになってしまっている。

もうちょっと丁寧に開ければいいのに。

「前、それ欲しいって言ってたから」

そう言いながらオタ先輩が捨てた包装紙を拾う。  
たっつん先輩偉いなあ。

包装紙の中から出てきたのはDSの箱。

誕生日プレゼントにDSとか奮発したもんだ。  
一人いくらなんだろう。

「ありがとう。」

欲しかったけど買おうかどうしようか迷ってて

「「いや〜喜んでもらえて何よりだよ」「

これで喜ぶってのがちょっと意外。

てっきり持つてるのかと思ってたのに。

いや、でもっー先輩達のプレゼントが本体で良かった〜

じゃなかったらソフトがプレゼントの俺って軽い嫌がらせしてるよ  
うなものだし。

「えっと、俺も一応プレゼント持って来たんで…どうぞ」

「え？」

オタ先輩が驚いたような顔をする。

そこで驚かなくても…

「お前から貰えるとは思ってなかった。

…ありがとう」

俺だって今日のパーティーに参加するなんて思ってなかったよ。

入ぶして今日で3日だし。

それなのに参加していいのか？

「中身はソフトですから、先輩達のプレゼントが本体ならちよつどよかったです」

「ありがと。」

なんか見越したかのような。」「

オタ先輩にお礼言われるとは…なんか変な感じ。

それから俺達は夕方までオタ先輩の家でゲームをしたりしていた。

帰る頃には外が暗くなつた。

こんなに遅くまで遊んだのなんて久しぶりだ。  
でも、すごく楽しかった。

先輩達と一緒に過ごす日々もそんなに悪くはないかな。

そんな事を思いながら俺は家路についた。

## 登校

「ユウ、お前何かいいことあった？」

月曜日の朝、いつものように向かえに来てくれたカズは開口一番そう言った。

『おはよう』もとばしていきなり何だ？

いい事？なんかあったっけ？

「おいおい、親友の俺にも秘密なのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ」

ただ本当にわかんないだよなあ。

週末にあった事といえばオタ先輩の誕生日パーティーぐらいしか…

…あれか？

「まあいいや。」

ユウがそんな顔してんの久しぶりだしさ」

っん。

カズが俺の右頬をつつく。

そんな顔ってどんな顔だよ。

んな事言われたってわかんないっつもの。

もちろん自分の顔なんか見えないし、鏡なんて持ってるわけじゃないしさ。

俺がそんな鏡なんて持ってたらすごいわ。

カズにからかわれ、知らないうちに割れてるのがオチだし。

「そんなってどんな？」

「そういう顔だつて」

カズは笑いながら歩きだす。

うーん。本当にそんな顔してるのかな？

まあ、いいけどさ。

「そついや、今日テストあるよな〜勉強した？」

…テスト？

あれ？俺達入学したばかりだよな？

木、金の二日間はいろいろ説明とか身体測定とかで潰れたけどさ、まだ三日目だよ？

なのにテスト？

「俺勉強やってなくてさ。やばいかも」

そう言いながらもカズは笑っている。

おい、そんなの聞いてねえよ。

いや、吉河（担任）が言ってたような気が…しないな。

言っただとしても俺聞いてないし。

「…何のテスト？」

「え、課題テストに決まってんじゃない」

…やっぱり知らん。

そもそも課題って何の課題？

俺達の課題なんてテキストが何冊かあったぐらいだし…あれか！

気付くの遅いな、俺…

でも、課題って人によって別々だったはず。どうやんのかな？

ここでちょっと学校の紹介をしとこうかな。

総合学科って呼ばれる形をとってて、いくつかの系列から自分の好きな系列を選ぶ。

一つの系列にもたくさん科目があるから、その中から自分が好き

なものを選ぶって感じ。

系列は進学（理数、文系）、パソコン、美術、商業、音楽、料理、福祉の7系列。

進学系列なんか毎年有名校に生徒を送り出してらしい。

なんか総合学科というより、進学校と専門を足した感じに近いかな。それぞれ入試の問題とか内容は別だし、学力も全然違う。

でも、共通テストってのを全員やらされてて、その結果でクラスが分けられたっぽい。

しかも、成績順じゃなくて成績が大体同じになるようになってるらしい。

最初に聞いた時はなんだそりゃ。って思った。

とにかく、系列がごちゃごちゃなクラスで過ごさなきゃいけないわけだ。

で、俺は文系クラス。

おい、今意外とかほんのちょっとでも思った奴！覚えとけよ…

これでも文系はちょっとは自身あるんだからな。ちよつとだけ。

で、俺の課題は国語と英語のテキストだったから、あれから出るのか…

妙に分厚くて半泣きになりながら終わらせた例のテキスト。あんま

解けなかったな…

自信ね〜

どうしょ…

「勉強してないんだけど…」

「やっぱり？だと思った〜」

入学してすぐに悪い点数はとりたくないけどなあ。

「でもなんとかなるだろ。範囲だって中学のだし、入学出来るくらいの学力あるんだから大丈夫だって」

…そっか。

言われてみればそっだよな。

苦手なことかも知るけど、考えてみればそんなにたいしたことないじゃん。

もっと早くに気付けばよかった。そしたら無駄な心配しなくてすんだのに。

「そこをもつちよっと早く言って欲しかったな」

「自分で気付けよ」

びじっとデコピンを食らわせてくる。

全く、なんだよ。しかも微妙に痛いし。

「デコピンとはまた地味な攻撃してくるな」

「ん？もつと過激な攻撃がいいのか？」

「それは嫌」

特に蹴りとかは御勘弁。

サッカー部の元エース（あ、高校でも狙ってるから元って言つと失礼か）の蹴りなんて食らったら…痛っ。想像しただけで痛い。

「じゃあいいじゃん。デコピンなんて可愛い攻撃くらい気にすんな」

はあ…

これでまあいつか。とか思っちゃうんだよな。

「それよりさ、この前新しいカラオケ出来たじゃん。今度行かない？」

いきなりカラオケの事を思い出してカズを誘うと、もちろんカズは乗ってきた。

さっきまでの会話はオール無視。つか流れたって感じかな。

俺達にはよくある事だ。

「コンビニの近くのだろ？もちろん行く行く」  
「じゃあな…」

そんな会話を繰り返しながら通学路を歩く。

先月までとは違う通学路、学校が近所と言えば近所だから特に変化は無いような気がする。

中学と高校は方向が逆だから本当は変化は結構あるんだけどね。

でも新学期のウキウキは同じ。

そのせいで学校生活三日目と言えど、なんとなくテンションは高い。

だから気付かなかったのかもしれない。

大事な大事な物を忘れてしまった事に。

## 慌ただしい朝

「…あれ？」

学校に着いて一限目の支度をしようと思った俺はある事に気が付いた。

え？何かって？

ヒント！部活に必要な物。

わかったかな？

え、わからない？

じゃあ次のヒント！この高校にはあまり親しみがない物。

これでわかったでしょ！

正解は…

「おっはよう佐」

この、なんとも言えないバカらしい声。

そして、俺をそんな風と呼ぶのはこのクラスに一人しかいない。

あからさまに嫌な顔をして声のした方を見ると、そこには笑顔のバカ一号…じゃない、ナルシスト…じゃなくてナルシがいた。

「…ナルシ」

朝っぱらからコイツの顔は見たくないな。うん。

普通さ、人の笑顔って見ると幸せな気持ちになったり、こっちも笑っちゃったりするもんじゃん。

なのにコイツの笑顔はなんかムカつく。

なんというか…たらしっぱい。

それにいかにも俺はモテてますって感じのオーラも醸し出してるし。

悔しいけど顔はいい方だし、実際モテるんだろうけどさ。

ということで、同じ男としては何とも嫌なヤツだ。

「どうしたの？テンション低いじゃん。

まだ学校始まって三日目だよ？

普通はもうちょっと明るくさ〜

…はっ！もしかして佑ってば人見知りとかするタイプ？

新しい環境に馴染めずに一人アンニュイな気分浸ってたとか？

そうか！そうなんだね！

ごめんよ。

そんな君の気持ちに気付いてあげられなくて。

親友失格だね…」

…どこからツツコムべきだろうか、このバカのマシンガントークに。

まず、三日月なのにテンション低いと言われても俺のテンションなんだから口出しをしないで欲しい。

いや、確かにさっきまでテンションは高かったぞ。

三日月と言えど新しい環境だし、微妙浮かれもするぞ。

だけどそれもさっきまで、忘れ物を知るまでの事だ。

そうだ！忘れ物！

どうしようかな。

取りに戻ると遅刻だし、もう家に人は居ないし…

かと言って私服で出たらまた何かやらされるかもしれない。

それだけは避けたい。

でもどうしよう。

「でも！これからは君の気持ちに気付いてあげられるように頑張るから！

そのためにはまず、お互いの事を知らないと」「  
あー、まだバカがなんかほざいてる。

思うんだけど、コイツの発言って（俺は親友って思ってないけど）  
親友に向けた言葉じゃない気がする。

普通に女の子に言う言葉だよな…

俺ってコイツの中で女の子の分類とか？

流石にそれはないか。

「俺達親友だし、お互いの事をあまり知らないのは良くないと思う  
んだ。」

そつだ！お互いをよく知るために今日俺の家にごない？

学校のすぐ近くだし、お菓子とかもあるよ」「

何が悲しくてお前の家になんか行かなきゃならんのだ。

そもそも部活があるっての。

「無理」

「何、その即答！酷くない？」

「別に」

お前相手なら全然酷くないし、むしろ酷いのはお前という存在だ。

「もしかして気付いてあげられなかった事に対して怒っているのかい？」

それはさっきも言ったとおり、お互いをよく知らないために起こってしまった事であって…」

もう駄目だコイツ。救えねえ。

まあ救おうなんて最初から思っていないから全然いいんだけどさ。

「ユウ」

廊下の方から俺を呼ぶ声がする。

この声は…オタ先輩？

廊下を見るとそこには何故か三年生のオタ先輩が。

周りの人達はスリッパの色が違う人が何故かいるため、少し戸惑ったような視線を向けている。

あ、この学校はスリッパの色で学年を判断する。（みんな私服着てるからそれしか判断材料がないってだけなんだけど）

一年が青、二年が赤、三年が緑。

色はもち上がりで、来年の一年は緑って感じてぐるぐる回るらしい。

だからちよっぴり先輩は目立つ。

それに先輩ってさ、学校ではあれだからさ。

なんか本当にオタクみたいな…ってそれは失礼か。

まあそんなわけで先輩は目立ってるわけだけど、当の本人は気にしてない様子。

流石先輩。あのくらぶに入ってるのは伊達じゃない。

「先輩どうしたんですか？」

俺はとりあえず廊下に向かう。

もちろん周りの視線＋ナルシはほっというて。

「ちよつとお礼を…って思ってな」

…以外。じゃなくて意外。

先輩ってそんなタイプには見えないのに。

いや、人を見かけで判断しちゃいけない。

「土曜はありがとな」

「あの…俺当日知ったし、準備とか出来なかったし、時間も遅くなつちやったし…」

そのせいで片付けは全部俺がやらされた。

あれは大変だったなあ。

「まあでもありがと」「  
多分今笑ってる…よな。

ほとんど何も出来なかったけど、そう言ってもらってうれしい。  
よかったなあってすごく思う。

「いえ、俺も楽しかったですから」

「そっか」

強引な感じで行ったパーティだけど、楽しかった。

俺が楽しんでも仕方ないんだけどさ。

「…そういえば忘れてたけど、月曜と水曜はくらぶ無いからな」

…はい？

今この人なんて言った？

月曜と水曜はくらぶが無い。

月曜＝今日くらぶが無い？

「今日くらぶが無い!?!」

周囲の目なんか気にせずにかんだ。

下手したら一組まで聞こえるような大声で。

「え、ちょ、聞いてないですよ！」

俺は先輩の肩をガシツと掴む。

休みの事とか誰もそんな事言っていないから毎日あるのかと思ってた。

いつもいつも何で先輩達はそういう事を教えてくれないんだよ！

「だから忘れてたって言ってるだろ」

「確かにそうですね、何で忘れるんですか！」

「これには深い事情があったり無かったり無かったりするんだよ」

無いのかよ！

嘘でもそこはあるって言っところよ！

そこで嘘付かれても何とも言えないとこだけど！

「俺の苦勞は…」

あの十分ぐらい慌てたのは無駄って事か。

超慌てたのに、バカみたい…

「なんか苦勞してたらしいけど、まあ意味無かったな」

悲しいくらいに自覚してるんで言わないで下さい。

先輩の肩を掴んでいた腕は力無く落ちる。

「それよりテストの勉強しなくていいのか？」

「一年って今日だって聞いたけど、違った？」

「…何でまたテスト？」

「今日らしいですけど、でも課題テストですよね？」

「最初のテストは難しいぞ」なんてあって入試の倍近くのレベルで出すからな」

「嘘ー！」

あれだつてかなり難かったのに…

俺は進学コースだから仕方ないんだけどさ。

「ちなみに課題テストは別にやるからな」

「え！」

何それ最悪…

何でそんなにテストばかり。

「当たり前だろ？系列違えば課題違うし」

そんなの聞いてない…

ちよつと先生伝え忘れ多くない？大丈夫？

まだ三十いつてないはずなのになんか心配だよ。

「それよりお前平気なのか？」

「え？」

「勉強」

「あ…」

時計を見るともう二十五分。SHRまであと五分だ。

やばい！やらなきゃ！

解の公式があれで、三角形の定義と定理が…

頑張つて公式を思い浮かべる。合ってるかわかんないけど。

「精々頑張れよ」

ひらひらと手を振りながら先輩は去って行く。

ちよつ、ま！…つてもらつてもどうしようもないのか。

とりあえず、なんか勉強しなきゃ！

俺は慌てて教室へと戻る。

何かまだ視線を感じるのは気のせいだろうか。いや、気のせいではない。

これが古典の反語って呼ばれるもので、文中では『や』または『か』で出てくる。

係り結びのところで出てきたやつ、だったかな。

『ぞなむやかこそ』って呪文のように覚えたなあ。

それより勉強勉強！

そんなわけで、俺は五分間だけど勉強を始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5169b/>

---

えんじょいくらぶ

2011年1月6日14時53分発行